

平成24年度事業報告書

 公益財団法人佐々木研究所

公益財団法人佐々木研究所 平成 24 年度事業報告

I. 平成 24 年度の主要な活動状況報告

総括

平成 24 年度は公益財団法人移行元年であり、附属杏雲堂病院は 6 月 1 日に創立 130 周年を迎えた。明治 15 年（1882 年）に佐々木東洋先生が杏雲堂病院創立時に掲げた「医学の進歩に寄与し、医業を以って社会に貢献する」という理念の下に研究と医療の一体化を実践してきた。2 代目院長の佐々木政吉先生は明治 27 年（1894 年）私邸に研究所を建設し今日の研究所の基礎を築いた。3 代目院長の佐々木隆興先生は研究所を財団法人化し、杏雲堂病院をその附属病院として公益的な組織とした。これにより研究機関および医療機関としての確固たる経営基盤が確立された。財団法人の寄付行為の目的には「本研究所は医学並びに医学に隣接する自然科学を研究することによって …………… 保健・福祉の向上に努めることを目的とする。」とあり、研究と医療を一体化した佐々木東洋先生の理念を継承した財団法人であることが明記されている。公益財団法人に移行するに際し、創業の理念と伝統を活かし医学研究財団であるという性格を、より鮮明に新定款に定めた。その研究は附属佐々木研究所、附属杏雲堂病院および附属湘南健診センターの 3 事業所によって、臨床と一体となって行われている。公益法人移行初年度は、事務面においては制度上大きく変わり手探り的なことも多かったが、研究、医療面に於いては特に問題はなかった。

1. 各事業所の実績の概要

(1) 附属研究所では所長のほか、専任研究員 5 名、研究助手 1 名、研究補助員 3 名、客員研究員 2 名が実験を伴う研究に従事した。他に杏雲堂病院および湘南健診センターの常勤医師、看護師等が兼任研究員として臨床研究を行っており、研究活動も活発化してきた。平成 24 年 7 月「臨床研究発表会」を 2 日間に亘り開催し、15 研究課題（前年は 12 件）の成果発表と討議があった。その他、本年度は学術誌に 27 編の論文（英文 15、和文 12）が発表され、前年度の 19 編（英文 7、和文 12）を上回った。学会発表、講演及び講義として 100 件（国際学会発表 14、国内学会発表 67、研究会・講演会 19）が行われ、前年度 48 件（国際学会発表 7、国内学会発表 41）から倍増した。さらに、外部に対する啓蒙としての総説 10 編が出版された。

また、研究機器の取得、バイオセイフティーに対応する実験室等の整備を行なう等、研究環境も整備され研究活動も軌道に乗り始めた。

(2) 附属杏雲堂病院に於いては院長の辞任に伴い、平成 24 年 4 月から理事長が院長を兼務し、副院長が院長代行という態勢になったが、平成 25 年 1 月から理事長の院長兼務が解かれ、副院長が病院管理者兼院長代行となり、併せて医療担当常務理事に就任した。

業況面でみると、医師の確保には最大限努力したものの、医師の退職、頭頸部外科の

廃止等による入院患者延数の減少（外来は平成 23 年度比増加）、により経営的には苦戦を強いられた。外来収入は 877 百万円で平成 23 年度比 64 百万円の増収となったが、入院収入は前記理由で平成 23 年度比 74 百万円の減収で 1,980 百万円となった。その他収益も含めた経常収益は 3,292 百万円で、予算比 Δ 254 百万円、平成 23 年度比 Δ 65 百万円であった。一方、内部管理面では院内組織の再整備、諸規程の整備・新設、諸会議の充実等病院のガバナンスは飛躍的に強化され、制度面のインフラは着実に整備された。

当院は神田駿河台の当地に於いて地域の方々から 130 年ご支援をいただいていた。「神田駿河台で 130 年、地域とともに杏雲堂病院」「このがんなら杏雲堂病院」の二本のスローガンを掲げ、がん治療のほか患者基盤の充実のため、地域医療を強化すべく地域の開業医及びクリニックとの連携を強化した。

- (3) 附属湘南健診センターは、経常収益 303 百万円と 3 億円を超え、年間受診者数は 1 万 3 千人を超え、ともに過去最高を記録し好成績であった。また、内視鏡検査総数は 1,100 件を超え、経鼻内視鏡を高精細の新機種に更新し、受診者から好評を得ている。
- (4) 収益事業である杏雲ビルは、近隣に新規大型ビルが大量供給されたことによる賃料の下落及びビルの機能の陳腐化等による競争力の低下により、空室が増大し賃料収入は大幅減となった。収益事業経常収益は 1,268 百万円となり予算比 9 百万円増加、平成 23 年度比 Δ 149 百万円の大幅な減収となった。
- (5) 財団全体の損益は経常収益合計 4,881 百万円となり予算比 Δ 222 百万円、平成 23 年度比 Δ 213 百万円であった。正味財産増減額（利益額）は 48 百万円となり予算比 Δ 11 百万円、平成 23 年度比 Δ 260 百万円で減収、減益の決算となった。財務基盤の確立を事業計画に掲げたが引き続き今後の大きな課題である。

2. 創立 130 周年記念事業の実施

期央に計画の見直しを行い、創立 130 周年記念事業として下記事業を行った。

(1) 病院 1・2 階の改修

老朽化が目立ってきた 1・2 階の共用部分の内装（床、天井、壁、照明）及び 2 階検診センターの改修並びに備品等の全面更新を行った。大変好評を頂いている。

(2) 大規模地震防災対策及び BCP 計画

建物非構造部分及び設備の防災・減災計画の調査、備品等の転倒防止対策調査を実施した。工事等は来年度に行いたい。また食料、飲料、医薬品及び物品等の備蓄計画の策定を行い、備蓄倉庫を地下 2 階に設置し受け入れ準備を整えた。備蓄品の購入は平成 25 年度となる。

(3) 病院経営診断の実施

レセプト及びカルテの分析を経営改善のステップとするべく外部コンサルタントに依頼し、結果の報告があった。これに基づき今後対策を講じて頂く。

3. その他

- (1) 医師の志気向上のため杏雲堂病院及び湘南健診センター医師を対象とした医師成果給制度を制定した。平成 25 年 6 月分から実施となる。
- (2) 杏雲ビルの 4 フロアーの共用部分のリニューアル工事を行った。
- (3) 今年度の役員構成は、平成 24 年度末現在、理事 11 名、監事 2 名、評議員 9 名（期初に比べ 3 名減）の体制であった。財団経営に関する会議としては、定例理事会 4 回、臨時理事会 4 回、評議員会 2 回、臨時評議員会 1 回及び経営会議を 20 回開催した。

II. 研究事業活動

1. 研究事業概要

公益財団法人佐々木研究所は、「患者に役立つ研究とその支援を行い、医学・医療の進歩に寄与する」ことを理念とし、「がんその他の疾患の予防・診断・治療の研究開発を行い、医学の進歩ならびに人材の育成を図り、より良い医療の推進、普及に努め、以って国民の健康増進に寄与することを目的とする」と定款に定め、平成 24 年度から附属佐々木研究所、附属杏雲堂病院、附属湘南健診センターを研究実施施設とする研究機関として、「医学研究を通じて国民の健康増進に寄与する」公益目的事業を行うことを新たなミッションとして研究事業を進めている。

創設以来の佐々木隆興先生、吉田富三先生による医学研究の伝統を堅持し、患者の求める医療に応える臨床に根差した研究を行う。患者の求める医療を医学研究課題として把握できるのは、医療の現場で診療にあたるリサーチマインドを持つ、医師、看護師、その他の医療従事者である。臨床の場でひらめいたことを医学研究課題として設定し、附属研究所における実験を基盤とする基礎的解析、ならびに附属病院における臨床的解析により、答えを出し患者に還元することが、行うべき公益目的事業と考えている。

附属研究所は、腫瘍ゲノム学系、内科系、外科系、予防医学系、看護学系、診療支援系、がん情報管理系の 7 臨床研究部門で構成され、がんをはじめとする疾病に関する研究を活発に遂行する。本年度は、常勤の医師全員、しかるべき看護師、その他の医療従事者が、研究所研究員を兼任して行う実験を伴わない従来型の臨床研究を継続するとともに、研究所専任研究員による実験を基盤とする研究活動を新たに開始した。研究所におけるこの新たな展開には、内科系と外科系臨床研究部門から、兼任研究者に加え研究所専任の研究者を構成員とする複数の実験研究チームを立ち上げ、それぞれの研究課題の達成に尽力した。附属病院においては、研究所兼任のリサーチマインドを持った医師、看護師、その他の医療従事者が、常時、研究課題について考え、診療の場における貴重な観察、患者試料の採取、収集と解析、患者臨床情報の蓄積など、活発な研究活動を展開した。

研究者としては、附属研究所においては、所長の他、研究所専任研究員 5 名（研究員 2 名（うち 1 名は期中着任）、非常勤研究員 3 名（共に期中着任））、研究助手 1 名、研究補助員

3名（うち1名は期中着任）、客員研究員2名が研究に従事した。また、附属病院における常勤医師、看護師、その他の医療従事者34名（部長6名、主任研究員15名、研究員13名）が研究所兼任研究者として研究に従事した。

実験施設としては、附属研究所が研究課題に則して、実験のできる場を提供することが役目である。ハードの面では、都心に位置する研究所として、バイオセーフティーの観点から適切に管理された実験区域の整備が重要である。研究所2階を、遺伝子組換え生物の使用における種の多様性確保、生体材料を用いた実験におけるバイオセーフティーに対応する実験管理区域として、P1レベル実験室3室、P2レベル実験室1室の整備を進め、研究推進を行った。実験に伴い生じた廃棄物に関し、産業廃棄物として処理すべき廃棄物への対応ルールを作成し、専門業者との契約の上、適切に廃棄するシステムを整備した。また、貴重な患者試料である臨床検体、種々の研究材料等の収集、保管のための複数ディープフリーザーを安全に管理するためのフリーザー室を研究所地下2階に設け、安全な保管環境を整備した。ソフト面では、生物多様性の確保、知財管理等への対応の充実に図りながら研究事業を進めた。

研究遂行のための研究費は、年度予算の事業活動費を基盤とした。さらなる研究活動発展のための研究費として、科学研究費補助金公募等への応募による外部資金の獲得、また、寄付金の獲得を推進した。

（1）がんその他の疾患に関する研究事業

疾患の理解、診断、治療に資する知見を得るための研究として、関節リウマチ、膠原病、糖尿病、がん一般、卵巣がん、子宮頸部がんなどを対象とする課題に取り組んだ。

関節リウマチに関して、サイトカイン IL-35 が患者の症状に及ぼす影響の解明を目的として、IL-35 発現ベクターの作成を行った。ヘテロダイマーIL-35 の構成タンパク質である EBI3 と IL-12 α をペプチドリンカーで連結し、EBI3 のアミノ末端に Pre-pro-trypsin リーダー配列を、IL-12 α のカルボキシル末端に FLAG タグを付加することで、細胞外分泌効率を高め、精製に利用する構造のベクターとした。このベクターをタンパク質発現用哺乳類細胞として一般的に使用される 293EBNA 細胞にトランスフェクションし、IL-35 産生安定細胞株を作成した。この細胞を培養し得られた IL-35 とヒト T 細胞を共培養することで、制御性 T 細胞が活性化され、エフェクター T 細胞の機能が抑制されることを示した。この結果は、IL-35 が治療に応用可能であることを示唆した。

糖尿病に関して、膵島の高次細胞凝集塊としての微小環境の重要性に着目し、各膵島構成細胞、特に血糖調節に重要な α 細胞及び β 細胞におけるシグナルネットワークについて解析するための 3 次元培養細胞系の構築を進めた。

がんにおける DNA メチル化異常の実態解明に関して、細胞内の DNA をメチル化されたままの状態に単離する技術の開発に向けての基盤づくりを行った。

消化器がんに関して、術前免疫能と外科領域術後感染症の関連性を明らかにするため、細

胞性免疫 (Th1 細胞) と液性免疫 (Th2 細胞) に関与する因子の mRNA と血清中のサイトカインを測定して、関連の検討を行った。Th1 細胞で発現する mRNA である T-bet とサイトカインである IP-10、Th2 細胞で発現する mRNA である GATA3 と血清因子である sCD30 を測定し、術前に、易感染状態、すなわち細胞性免疫機能低下、を簡便に把握出来る因子として sCD30 の術前値が候補として挙げられた。

乳がんに関して、過剰発現が知られている糖タンパク質 MUC1 の糖鎖上の 3'硫酸化コア 1 糖鎖(SO₃-→3Galβ1→3GalNAc)を特異的に認識するレクチンと、MUC1 抗体を用いたレクチン-ELISA 系を構築し、90%の陽性率を示すことを確認している。乳がん診断マーカーとしての実用化に向けて、検出法の高感度化を多角的に検討した。ガラクトースを認識し糖鎖に結合あるいは糖鎖間を架橋するタンパク質ガレクチン-4 は、硫酸化糖鎖を持つ MUC1 と結合する。腫瘍の転移に関わる悪性度と関連のある MUC1 の細胞表面への分泌、細胞の転移性獲得機構におけるガレクチン-4 の関与を明らかにする為に、細胞にガレクチン-4 の変異体及び Src キナーゼ等を導入したところ、ガレクチン-4 が Src キナーゼによってリン酸化されることを見出した。ガレクチン-4 結合性 MUC1 が、再発転移した乳がん患者血清に高頻度に見られること、転移能の高いスキルス胃癌細胞(NUGC-4)にガレクチン-4 及び MUC1 が強発現していることから、がん細胞の転移能に関わっている可能性が考えられた。卵巣がんに関して、抗がん剤耐性を引き起こす接合組織増殖因子の関与する情報伝達系において、この因子の下流で機能する分子を分子標的治療薬開発の標的として探索するため、2次元電気泳動法システムを構築した。

(2) 患者の生活の質の維持・向上に資する治療法の研究事業

関節リウマチに関して、生物学的製剤の薬効の臨床評価と長期安全性を検討し、単剤治療における効果減弱例に対し、投与量の増量や投与間隔の短縮を行い、一定の成果を上げている。また、関節リウマチ患者における生物学的製剤の効果予測因子を検討し、IL-6 受容体を直接ブロックする生物学的製剤である Tocilizumab 投与患者において、治療反応群と非反応群では、治療前後で慢性炎症性貧血の主たる原因である Hepcidine-25 が異なる血清中濃度変動を示すことを見いだした。Tocilizumab の効果予測の一助となりうると考えられた。

肝細胞がん患者に関して、再発に対する効果的な治療法開発のため、無痛ラジオ波焼灼療法 (RFA) により肝細胞がんを根治的に治療した C 型慢性肝炎患者を対象に、ペグインターフェロン α 製剤と抗ウイルス薬リバビリンの併用療法を行い、再発に寄与する因子について多変量解析を行った。その結果、インターフェロンの使用と腫瘍マーカーDCP

(PIVKA-II、 protein induced by vitamin-K absenceII) の特定量以上の発現が再発に寄与する独立した因子であった。肝細胞がんに対する RFA 治療後、抗ウイルス療法によってウイルス駆除が達成された場合は、予後が極めて良好である結果を得た。肝細胞がんの母地である肝硬変は、進行に伴い血中アミノ酸インバランスと低タンパク血症、早朝空腹時

には飢餓状態のタンパク質・エネルギー低栄養状態が引き起こされ、予後に影響がある。この現象に対し、夜間就寝前栄養摂取（Late Evening Snack、LES）として、分枝鎖アミノ酸製剤（BCAA）を服用することが、有意に呼吸商、窒素出納、血清アルブミン値及び自覚症状の改善に有効であったとの報告がある。肝硬変患者に、BCAA 製剤を LES として長期的に用いることは、合併症及び病態進展抑制に期待され、症例登録が進行中である。

子宮頸部がんの光線力学的療法（PDT）において、光過敏症軽減、入院期間短縮を目指した第 2 世代光線力学的療法の開発、また、外来治療を目指した第 3 世代光線力学的療法の開発を目的とし、半導体レーザー（PD レーザー）と既存の子宮頸部照射用プローブとの接続実験を行った。その結果、プローブ間タンデム接続に伴うレーザーエネルギーの損失は、約 10%程度で充分使用可能と考えられた。しかし、患部観察に使用するコルポスコープは PDT 専用のもを新たに開発する必要があることが判明した。

消化器がんに関して、術後の合併症の有無により、術後再発率に差が出る報告があることから、手術による侵襲が小さいほど合併症の発生が抑えられ、術後再発が低下する可能性が考えられる。腹腔鏡下手術と開腹手術の全例において術前と術後の血清を採取、保存し、Th1/Th2 細胞のバランス、アディポネクチンなど血中サイトカイン濃度等の比較を進め、合併症の発生率との相関を検討している。

直接的レニン阻害薬アリスキレン（ラジレス）が、深部静脈血栓症後遺症の浮腫に対して効果を示すことを見出した。肺がんに対しての無痛ラジオ波焼灼療法の有用性の検討は進行中であり、びまん性肺疾患に対する CT ガイド気管支鏡使用に関しては、その有用性を確認した。これらの検討の結果は、患者の生活の質の維持・向上に資する治療法につながると考えられる。

手根管症候群に対する手外科手術機材の開発に関し、手根管前後の上肢前腕遠位から手掌部における腱・神経・動静脈の解剖学的位置や変異を確認し、このデータを基に内視鏡の長軸径口径・刺入位置・剪刀径・回転角度・回転様式その他を決定し設計図を作成した。現在、試作機を作成中である。腱鞘切開専用メスの刃部における周囲組織を保護する構造に対して改良を行い、改良メスを使用した約 180 症例全例において、臨床症状が改善した結果を得た。整形外科患者の生活の質の維持・向上に貢献すると考えられる。

子宮がん、卵巣がん、乳がんの症例でタキサン系、白金系抗がん剤での治療を行った患者の睫毛脱毛に関し、抗がん剤治療初期から睫毛育毛剤ラティース（ビマトプロスト）を投与した症例は、治療後 1 か月経過時に、成長期毛率とほぼ同量の平均睫毛数の約 20%から 30%程度を維持し、ラティース塗布により成長期にある睫毛が抗がん剤の影響を受けなくなることで、ラティース投与時期は初期もしくは抗がん剤治療後 1 か月が最適で、抗がん剤治療経過中に投与してもほとんど効果がないことを明らかにした。病理像は、抗がん剤が外毛根鞘への強い障害を示すことから、睫毛の発毛発生バジル位置が外毛根鞘にあり、抗がん剤による新毛発生の障害との関連が示唆された。得られた結果は、形成外科的観点から、患者の美容における質の維持、精神的負担軽減に貢献すると考えられる。

食道がん治療におけるシスプラチン腎毒性のハイドレーションによる軽減を検討し、その効果を検証した。分子標的薬剤 Lapatinib は大きな錠剤タイケルブ錠として商品化されているが、1回に5錠の服用は患者への負担が大きい。錠剤の粉砕、懸濁投与による血中濃度等体内動態を解析し、患者の負担軽減を検討した。

(3) がんその他の疾患に関する予防医学的研究事業

男性と女性の心電図における明確な性差を明らかにし、女性ホルモンの関与を示唆した。子宮頸部がん検診における細胞診の精度向上と各種HPV検査の臨床評価に関する検討の一環である JGOG の治験として、Cobas4800HPV テストの臨床性能評価試験に関する研究を行った。すなわち、子宮頸部細胞診で明確な判断ができないと診断された患者を対象として、リアルタイム PCR 法で子宮頸部細胞中の HPV DNA を検出し、Cobas4800 システムと既承認品「キアゲン HC2」ハイブリッドキャプチャーシステムとの比較をした結果、良好な一致を示し、Cobas4800 システムが、従来の13種類のHPV核酸の検出に加え、より悪性度の高いHPV16型と18型の個別同定が可能なことから、子宮頸がんの早期発見、早期治療において臨床的に意義があると考えられた。また、子宮頸部病変におけるリニアアレイ HPV ジェノタイピング法を用いた HPV 型判定の臨床的有用性に関する検討を行い、異形成以上の病変を高感度に検出することができ、臨床的に有用性があることが示唆された。無症候性胆石症の長期追跡調査を2005年に開始したが、無症候性胆石が指摘された健診者は2012年には262例に達し、粗大胆石プラス、壁肥厚マイナスのタイプIが全体の80%であった。この結果は、胆石に伴って起きる慢性胆嚢炎が比較的軽いことを示唆し、無症候性であることと関連すると考えられた。超音波検査の際、特に壁変化が出現するかを注意して観察することが重要で、壁肥厚のない症例は無症状である限り経過観察で良いと考えられた。

動脈硬化の指標である血圧脈波の値と、血中脂質濃度および血糖値との関係を解明するため、検診に血圧脈波検査を取り入れ、血中脂質濃度、血糖値およびHbA1c値と血圧脈波検査の中のCAVI値（動脈の硬さの指標）との比較が進行中である。

(4) 臨床研究者の育成を図る事業

各種疾患の病因、病態の理解、診断、治療等に関する分子レベルでの最新情報を、その領域における専門家による講演、セミナー等を開催することにより、臨床研究者に伝え、そのリサーチマインドの育成に役立てることを今後押し進める。研究所での実験を伴う研究において、兼任研究員の積極的な参加、医系大学院等の学生、研究者の受入れを行うことを念頭に、研究所専任研究員による活発な研究活動の推進を行った。実験研究推進の結果、若手研究者の受入れが可能になれば、臨床医学研究への興味を喚起し、より深い医学研究を目指す動機付けとなるともに、研究所としての研究活動の活発化、次世代の研究者の育成に寄与できるものとする。

2. 研究の公表

研究成果の公表に関しては、知的財産権に関する配慮の上、随時、論文発表、学会発表で公表した。また、各臨床研究部門において平成 23 年度事業計画書に記載の研究課題に取り組んだ各研究成果を、広く研究者の間で分かち合い、また、理事、評議員に報告するため、平成 24 年 7 月、2 日間にわたって「臨床研究発表会」を開催した。秘密保持誓約書に記述の内容に合意の上、多数の関係者の出席のもと、15 研究課題の成果発表と活発な討論を行った。

3. 研究成果発表

【学術誌発表論文】

英文論文

1. Takata A, Otsuka M, Yoshikawa T, Kishikawa T, Hikiba Y, Obi S, Goto T, Kang YJ, Maeda S, Yoshida H, Omata M, Asahara H, Koike K. MicroRNA-140 acts as a liver tumor suppressor by controlling NF- κ B activity by directly targeting DNA methyltransferase 1 (Dnmt1) expression. *Hepatology* 57:162-170, 2013
2. Shiina S, Tateishi R, Imamura M, Teratani T, Koike Y, Sato S, Obi S, Kanai F, Kato N, Yoshida H, Omata M, Koike K. Percutaneous ethanol injection for hepatocellular carcinoma: 20-year outcome and prognostic factors. *Liver Int.* 32:1434-1442, 2012
3. Uchino K, Obi S, Tateishi R, Sato S, Kanda M, Sato T, Arano T, Enooku K, Goto E, Masuzaki R, Nakagawa H, Asaoka Y, Kondo Y, Yamashiki N, Goto T, Shiina S, Omata M, Yoshida H, Koike K. Systemic combination therapy of intravenous continuous 5-fluorouracil and subcutaneous pegylated interferon alfa-2a for advanced hepatocellular carcinoma. *J. Gastroenterol.* 47:1152-1159, 2012
4. Shiina S, Tateishi R, Arano T, Uchino K, Enooku K, Nakagawa H, Asaoka Y, Sato T, Masuzaki R, Kondo Y, Goto T, Yoshida H, Omata M, Koike K. Radiofrequency ablation for hepatocellular carcinoma: 10-year outcome and prognostic factors. *Am. J. Gastroenterol.* 107:569-577; quiz 578, 2012
5. Kogure H, Isayama H, Nakai Y, Tsujino T, Matsubara S, Yashima Y, Ito Y, Hamada T, Takahara N, Miyabayashi K, Mizuno S, Mohri D, Kawakubo K, Sasaki T, Yamamoto N, Hirano K, Sasahira N, Tada M, Koike K. High single-session success rate of endoscopic bilateral stent-in-stent placement with modified large cell Niti-S stents for malignant hilar biliary obstruction. *Dig. Endosc.* Mar 20, 2013
6. Yoshida S, Watabe H, Isayama H, Kogure H, Nakai Y, Yamamoto N, Sasaki T, Kawakubo K, Hamada T, Ito Y, Yashima Y, Sasahira N, Hirano K, Yamaji Y, Tada M, Omata M, Koike K. Feasibility of a new self-expandable metallic stent for

- patients with malignant colorectal obstruction. *Dig. Endosc.* 25(2):160-166, 2013
7. Togawa O, Isayama H, Tsujino T, Nakai Y, Kogure H, Hamada T, Sasaki T, Yashima Y, Yagioka H, Arizumi T, Ito Y, Matsubara S, Yamamoto N, Sasahira N, Hirano K, Toda N, Tada M, Koike K. Management of dysfunctional covered self-expandable metallic stents in patients with malignant distal biliary obstruction. *J. Gastroenterol.* Jan 25, 2013
 8. Mizuno S, Yashima Y, Yagioka H, Sasaki T, Matsubara S, Yamamoto N, Hirano K, Sasahira N, Tada M, Koike K. The results of the Tokyo Trial of Prevention of Post-ERCP Pancreatitis with Risperidone (Tokyo P3R): a multicenter, randomized, phase II, non-placebo-controlled trial. *J. Gastroenterol.* Oct 24, 2012
 9. Sasaki T, Isayama H, Nakai Y, Togawa O, Kogure H, Kawakubo K, Mizuno S, Yashima Y, Ito Y, Yamamoto N, Sasahira N, Hirano K, Tsujino T, Toda N, Tada M, Omata M, Koike K. Predictive factors of solid food intake in patients with malignant gastric outlet obstruction receiving self-expandable metallic stents for palliation. *Dig. Endosc.* 24:226-230, 2012
 10. Isayama H, Sasaki T, Nakai Y, Togawa O, Kogure H, Sasahira N, Yashima Y, Kawakubo K, Ito Y, Hirano K, Tsujino T, Toda N, Tada M, Omata M, Koike K. Management of malignant gastric outlet obstruction with a modified triple-layer covered metal stent. *Gastrointest Endosc.* 75:757-763, 2012
 11. Hirano K, Isogawa A, Tada M, Isayama H, Takahara N, Miyabayashi K, Mizuno S, Mohri D, Kawakubo K, Sasaki T, Kogure H, Yamamoto N, Sasahira N, Toda N, Nagano R, Yagioka H, Yashima Y, Hamada T, Ito Y, Koike K. Long-term prognosis of autoimmune pancreatitis in terms of glucose tolerance. *Pancreas.* 41:691-695, 2012
 12. Yashima Y, Sasahira N, Isayama H, Kogure H, Ikeda H, Hirano K, Mizuno S, Yagioka H, Kawakubo K, Sasaki T, Nakai Y, Tada M, Yoshida H, Omata M, Koike K. Acoustic radiation force impulse elastography for noninvasive assessment of chronic pancreatitis. *J. Gastroenterol.* 47:427-432, 2012
 13. Kambe H, Yamaji Y, Sugimoto T, Yamada A, Watabe H, Yoshida H, Omata M, Koike K. A randomized controlled trial of sodium phosphate tablets and polyethylene glycol solution for polyp detection. *J. Dig. Dis.* 13:374-380, 2012
 14. Sakamoto M. Safety guidelines for photodynamic therapy in the treatment of early stage cancer and dysplasia of the uterine cervix. *Laser Therapy* 21:60-64, 2012
 15. Ideo H, Hoshi I, Yamashita K and Sakamoto M. Intracellular Localization and phosphorylation of galectin-4 is Controlled by Src family kinases. in submission

和文論文

1. 杉本貴史「マロリーワイス症候群」 内科 109: 1216-1217、2012
2. 杉本貴史「脾結腸曲症候群」 内科 109: 1222-1223、2012
3. 佐藤新平「肝腎症候群」 内科 109: 1237-1238、2012
4. 河井敏宏 医学と薬学 68: 258-261、2012
5. 川本 潤、三浦世樹、深田忠臣、林 達也 「腓骨癌骨転移に対して疼痛緩和放射線照射が有効であった1例」 癌と化学療法(0385-0684) 39: 2143-2145、2012
6. 川本 潤、三浦世樹、深田忠臣、林 達也 「胆嚢摘出術後腹部ドレーン出血を契機に診断された先天性血友病 B の1例」 日本消化器外科学会雑誌 in press
7. 三浦世樹、川本 潤、深田忠臣 「嚢胞性変化を示した胃外発育型胃癌の1例」 癌と化学療法(0385-0684) 39: 2333-2335、2012
8. 三浦世樹、川本 潤、林 達也 「S状結腸癌術後2ヵ月目に多発性骨髄腫と診断された同時性重複癌の1例」 日本臨床外科学会雑誌(1345-2843) 73: 3315-3319、2012
9. 林 達也、川本 潤、三浦世樹 「インフリキシマブ治療中の press through package 誤飲による小腸穿孔の1例」 日本臨床外科学会雑誌(1345-2843) 7: 177-3181、2012
10. 長濱 靖、富田善雅、楠瀬浩一 「手指の関節周辺骨折に対する mini hook plate 法の治療成績」 日手会誌 29: 430-433、2013
11. 小野貴之、吉積 隆、平野浩一、大山和一郎、海老原 敏 「下咽頭部癌に対する喉頭温存下咽頭部分切除術の治療成績」 頭頸部外科 22: 293-296、2012
12. 嘉屋隆介、他 「膣原発悪性黒色腫の1例」 東京産科婦人科学会雑誌、2012年12月

【国際学会】

1. Obi S, Sato S, Sato T, Kawai T, Kajiyama Y, Sugimoto T, Yashima Y, Kanda M. Sorafenib for Advanced HCC – Japanese Experience –. the 22th Conference of the Asian Pacific Association for the Study of the Liver, Taipei, 2012
2. Sato S, Kajiyama Y, Kawai T, Yashima Y, Sugimoto T, Sato T, Kanda M, Obi S, Ebihara T, Togo G. Percutaneous Radiofrequency Ablation for unresectable Metastatic liver tumor compared with treated HCC. the 22th Conference of the Asian Pacific Association for the Study of the Liver, Taipei, 2012
3. Sato T, Sato S, Kawai T, Kajiyama Y, Sugimoto T, Kanda M, Obi S. Late Evening Snack have an impact on patients undergoing treatment for advanced hepatocellular carcinoma. the 22th Conference of the Asian Pacific Association for the Study of the Liver, Taipei, 2012
4. Yashima Y, Obi S, Kajiyama Y, Kawai T, Sugimoto T, Kanda M, Sato T, Sato S. Liver homogeneity measurement of healthy and cirrhotic using ASQ. the 22th Conference of the Asian Pacific Association for the Study of the Liver, Taipei, 2012

5. Kawai T, Sato S, Sato T, Kanda M, Obi S, Toda N. Therapeutic outcomes of hepatic arterial infusion chemotherapy and systemic chemotherapy with interferon and 5-FU accompanying biliary drainage to treat obstructive jaundice in patients with advanced hepatocellular carcinoma: Aggressive biliary decompression improves prognosis. the 22th Conference of the Asian Pacific Association for the Study of the Liver, Taipei, 2012
6. Kajiyama Y, Kawai T, Yashima Y, Sugimoto T, Sato T, Kanda M, Sato S, Obi S. Therapeutic efficacy and safety of hepatic arterial infusion chemotherapy with cisplatin fine-powder (IA-call®) in highly advanced HCC. the 22th Conference of the Asian Pacific Association for the Study of the Liver, Taipei, 2012
7. Yashima S, Sato T, Sato Y, Kajiyama T, Kawai T, Sugimoto M, Kanda S, Obi S. Combination therapy of intraarterial 5-Fluorouracil and Pegylated Interferon-Alpha Subcutaneous Injection for Unresectable Biliary Tract Adenocarcinoma. Digestive Disease Week 2012, San Diego, 2012
8. Sugimoto T, Sato S, Sato T, Kajiyama Y, Kawai T, Yashima Y, Kanda M, Obi S. Gastric Neoplasms: Precursors Biology Diagnosis and Therapy. Digestive Disease Week 2012, San Diego, 2012
9. Sato S, Obi S, Kajiyama Y, Kawai T, Sato T, Kanda M. Percutaneous Radiofrequency Ablation for unresectable Metastatic liver tumor compared with treated HCC. 2012 APASL Single Topic Conference, Ulaanbaatar, 2012
10. Kawai T, Yashima Y, Sugimoto T, Sato T, Kanda M, Sato S, Obi S. Assessment Of 59 Cases Of Gastroesophageal Variceal Bleeding Associated With Portal Vein Invasion of Hepatocellular Carcinoma. 6th International Liver Cancer Association, Berlin, 2012
11. Obi S, Sato S, Sato T, Kawai T, Sugimoto T, Yashima Y, Kanda M. Combination Therapy of Intra-Arterial 5-FU and Systemic IFN for Advanced Hepatocellular Carcinoma. 6th International Liver Cancer Association, Berlin, 2012
12. Sato T, Kawai T, Yashima Y, Sugimoto T, Kanda M, Kouno T, Sato S, Obi S. 18 cases of brain metastases from hepatocellular carcinoma. 6th International Liver Cancer Association, Berlin, 2012
13. Yashima Y, Sato S, Sato T, Kawai T, Sugimoto T, Kanda M, Obi S. Ultrasonographic homogeneity values of pancreas measured by acoustic structure quantification (ASQ) method were higher in habitual drinkers. European Society of Radiology, Vienna, 2013
14. Sakamoto M, Kaya R, Miyake K, Motegi M, Koyamatsu Y, Akiya T, Ochiai K, Tanaka T, Okamoto A. Photodynamic therapy for recurrent or residual uterine cervical

cancer after conization. 14th biennial meeting of the International Gynecologic Cancer Society (IGCS) in Vancouver, Canada, 2012

【国内学会】

1. 山中健次郎、他 「当院における関節リウマチ患者に対する生物学的製剤の使用状況について(第2報)」 日本リウマチ学会総会・学術集会、東京、2012年4月
2. Soichiro Nakano, Satoshi Suzuki, Tomoko Miyashita, Takashi Watanebe, Shinji Morimoto, Yoshinari Takasaki. Immunoregulatory Role of IL-35 in T cells from patients with Rheumatoid Arthritis. 第40回日本臨床免疫学会総会、東京、2012年9月
3. 大城雅也、関谷剛男 「深部静脈血栓症後遺症の浮腫に対する抗レニン薬アリスキレンの有用性」 第26回日本臨床内科医学会、徳島、2012年10月
4. 小尾俊太郎、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保 「看取りから振り返った肝癌治療戦略」 第48回日本肝臓学会総会、金沢、2012年6月
5. 佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保、小尾俊太郎「チームRFAによる安全に施行するためのラジオ波焼灼療法と合併症対策」 第48回日本肝臓学会総会、金沢、2012年6月
6. 河井敏宏、佐藤新平、佐藤隆久、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保、小尾俊太郎「進行肝細胞癌における胃食道静脈瘤破裂89例の検討」 第48回日本肝臓学会総会、金沢、2012年6月
7. 小尾俊太郎、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保「動注とSorafenibの使い分けを探る」 第6回日本肝癌分子標的治療研究会、箱根、2012年6月
8. 八島陽子、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保、小尾俊太郎 「Acoustic Structure Quantification(ASQ)法を用いた脾実質の粗さの定量評価の試み」 第43回日本脾臓学会大会、山形、2012年6月
9. 佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保、小尾俊太郎「肝細胞癌骨転移に対する放射線療法」 第48回日本肝癌研究会、金沢、2012年7月
10. 佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保、小尾俊太郎「高度進行肝細胞癌に対するアイエーコール肝動注化学療法の成績(第2報)」 第48回日本肝癌研究会、金沢、2012年7月
11. 小尾俊太郎、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保「分子標的薬、どのような症例に、どのように使うべきか？」 第48回日本肝癌研究会、金沢、2012年7月

12. 小尾俊太郎、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保「本当に TAE failure は、分子標的治療に移行すべきなのか？」 第 48 回日本肝癌研究会、金沢、2012 年 7 月
13. 小尾俊太郎、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保「動注化学療法 845 例のエビデンス」 第 48 回日本肝癌研究会、金沢、2012 年 7 月
14. 河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、佐藤隆久、菅田美保、佐藤新平、小尾俊太郎「人参湯・真武湯により著効が得られた進行肝細胞がんの 1 症例」 第 48 回日本肝癌研究会、金沢、2012 年 7 月
15. 佐藤隆久、梶山祐介、河井敏宏、八島陽子、杉本貴史、菅田美保、佐藤新平、小尾俊太郎「肝切除後の巨大腹膜播種を伴う再発に対し、血管塞栓術とソラフェニブ内服が有効であった一例」 第 48 回日本肝癌研究会、金沢、2012 年 7 月
16. 梶山祐介、河井敏宏、八島陽子、杉本貴史、佐藤隆久、菅田美保、佐藤新平、小尾俊太郎、菊池健太郎 「インターフェロン 5FU 動注療法が奏功した肝細胞癌、肺転移の一例」 第 48 回日本肝癌研究会、金沢、2012 年 7 月
17. 小尾俊太郎、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保「進行肝細胞癌に対する動注化学療法の成績と今後の展開」 第 10 回日本臨床腫瘍学会、大阪、2012 年 7 月
18. 河井敏宏、八島陽子、杉本貴史、佐藤隆久、菅田美保、佐藤新平、小尾俊太郎 「門脈腫瘍塞栓を伴う肝癌症例での胃食道静脈瘤破裂 59 例の検討」 第 19 回日本門脈圧亢進症学会総会、東京、2012 年 7 月
19. 小尾俊太郎、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保「門脈腫瘍浸潤を伴う肝癌治療と門脈圧亢進症」 第 19 回日本門脈圧亢進症学会総会、東京、2012 年 7 月
20. 河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、佐藤隆久、菅田美保、佐藤新平、小尾俊太郎 「当院における進行肝細胞癌症例での胃食道静脈瘤破裂 98 例の検討」 第 54 回日本消化器病学会大会、神戸、2012 年 10 月
21. 小尾俊太郎、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保 「動注と Sorafenib の使い分けを探る」 第 54 回日本消化器病学会大会、神戸、2012 年 10 月
22. 杉本貴史、山地 裕、小池和彦 「胃 ESD 後異時性発癌の危険因子の検討」(優秀演題) 第 54 回日本消化器病学会大会、神戸、2012 年 10 月
23. 梶山祐介、河井敏宏、八島陽子、杉本貴史、佐藤隆久、菅田美保、佐藤新平、小尾俊太郎 「進行肝細胞癌患者におけるシタグリプチン投与に関する検討」 第 16 回日本肝臓学会大会、神戸、2012 年 10 月
24. 佐藤新平、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、佐藤隆久、菅田美保、小尾俊太

- 郎 「Sorafenib Failure に対する IFN 併用 5FU 動注・全身投与の成績」 第 16 回日本肝臓学会大会、神戸、2012 年 10 月
25. 八島陽子、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、菅田美保、小尾俊太郎 「肝癌に対する ASQ(Acoustic Structure Quantification)法の有効性の検討」 第 54 回 日本消化器病学会大会、神戸、2012 年 10 月
26. 佐藤隆久、梶山祐介、河井敏宏、八島陽子、杉本貴史、菅田美保、河野勤、佐藤新平、小尾俊太郎 「肝細胞癌・脳転移の 18 例」 第 54 回日本消化器病学会大会、神戸、2012 年 10 月
27. 小尾俊太郎、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保 「あきらめない肝癌治療—進行がんに挑む—」 第 16 回日本肝臓学会大会、神戸、2012 年 10 月
28. 小尾俊太郎、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保 「進行肝細胞癌の治療—動注と Sorafenib の使い分けを探る—」 第 50 回日本癌治療学会、横浜、2012 年 10 月
29. 佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保、小尾俊太郎 「臍頭十二指腸切除後の肝転移に対するラジオ波焼灼療法」 第 99 回日本消化器病学会総会、鹿児島、2013 年 3 月
30. 小尾俊太郎、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、八島陽子、菅田美保 「血清フェリチン値は進行肝細胞癌の予後を規定するかもしれない」 第 99 回日本消化器病学会総会、鹿児島、2013 年 3 月
31. 八島陽子、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、杉本貴史、菅田美保、小尾俊太郎 「手術不能胆道癌に対するインターフェロン併用 5FU 動注療法の成績」 第 99 回日本消化器病学会総会、鹿児島、2013 年 3 月
32. 杉本貴史、佐藤新平、佐藤隆久、河井敏宏、梶山祐介、八島陽子、菅田美保、小尾俊太郎 「進行肝細胞癌症例の予防的静脈瘤治療は吐血死を予防できる」 第 99 回日本消化器病学会総会、鹿児島、2013 年 3 月
33. 高橋英介「CT ガイド気管支鏡の有用性について」第 64 回日本気管食道科学会総会、東京、2012 年 11 月
34. 高橋英介「反回神経麻痺に対して姑息的放射線療法を行った肺がんの 1 例」第 34 回日本癌局所療法研究会、福島、2012 年 6 月
35. 川本 潤、三浦世樹、深田忠臣、佐藤新平、小尾俊太郎 「子宮平滑筋肉腫術後肝転移に対するラジオ波・化学療法後の局所再発例にSalvage Surgeryを行った1例」 第24 回日本肝胆膵外科学会総会、大阪、2012年5月 日本肝胆膵外科学会・学術集会プログラム・抄録集24回、 485、2012
35. 川本 潤、三浦世樹、深田忠臣、林 達也、安田文子、服部泰子 「当科における結腸直腸術後SSIの現状 SSI予防策を導入して」 第25回日本外科感染症学会、千葉、

- 2012年11月 日本外科感染症学会雑誌(1349-5755) 9: 595、2012
36. 川本 潤、三浦世樹、深田忠臣、林 達也 「子宮平滑筋肉腫術後異時性肝臓転移に対して積極的切除を行った1例」 第74回日本臨床外科学会総会、東京、2012年11月 日本臨床外科学会雑誌(1345-2843) 73: 765、2012
 37. 川本 潤、三浦世樹、深田忠臣 「非常に稀な転移形式: High Risk Stage1A 胃癌術後小腸転移の1例」 第67回日本消化器外科学会総会、富山、2011年7月
 38. 川本 潤、三浦世樹、深田忠臣 「膵癌骨転移に対して疼痛緩和放射線照射が有効であった1例」 第34回癌局所療法研究会、福島、2012
 39. 川本 潤、三浦世樹、深田忠臣、林 達也 「開腹歴のある腹腔鏡補助下結腸直腸切除の検討」 第25回日本内視鏡外科学会、横浜、2012年12月
 40. 林 達也、川本 潤、三浦世樹 「腹腔鏡下胆嚢摘出術時に判明した胆嚢副肝の1切除例」 第25回日本内視鏡外科学会、横浜、2012年12月 日本内視鏡外科学会雑誌(1344-6703) 17: 618、2012
 41. 三浦世樹、川本 潤、深田忠臣、林 達也 「腹部CTで術前診断しえた左傍十二指腸ヘルニアの1例」 第74回日本臨床外科学会総会、東京、2012年11月 日本臨床外科学会雑誌
 42. 林 達也、川本 潤、三浦世樹 「インフリキシマブ投与中に発症したPress Through Package誤飲による小腸穿孔の1例」 第74回日本臨床外科学会総会、東京、2012年11月 日本臨床外科学会雑誌(1345-2843) 73巻増刊、709、2012
 43. 三浦世樹、川本 潤、深田忠臣、小尾俊太郎 「肝細胞癌腹膜播種再発に対し3度の切除術を施行した1例」 第24回日本肝胆膵外科学会総会、大阪、2012年5月 日本肝胆膵外科学会・学術集会プログラム・抄録集24回、313、2012
 44. 深田忠臣、川本 潤、三浦世樹 「肝細胞癌に対する人工胸水下ラジオ波焼灼術後合併症であると思われた右横隔膜ヘルニア嵌頓の1例」 千葉医学雑誌(0303-5476) 88: 86、2012
 45. 安田文子、服部泰子、川本 潤 「当院における消化器外科領域SSIの検討 SSIサーベイランスを開始して」 第27回日本環境感染学会総会、福岡、2012年2月 日本環境感染学会誌(1882-532X) 27巻Suppl.: 191、2012
 46. 長濱 靖、富田善雅、ミユラー中嶋理子 「腱鞘切開専用メスの開発と治療成績」 第5回中央地区整形外科懇話会、中央区、東京、2012年6月
 47. 長濱 靖、富田善雅、ミユラー中嶋理子、楠瀬浩一、有富健太郎 「手指の関節周辺骨折に対するmini hook plate固定法の治療成績」 第55回日手会、横浜、2012年4月
 48. 富田善雅、長濱 靖、楠瀬浩一、原 章、有富健太郎 「前腕悪性骨腫瘍の再建」 第55回日手会、横浜、2012年4月
 49. 長濱 靖、富田善雅、ミユラー中嶋理子: 腱鞘切開専用メスの開発と治療成績; 第5回中央地区整形外科懇話会、中央区、東京、2012年6月

50. 長濱 靖、富田善雅、楠瀬浩一 「側正中切開による爪下グロムス腫瘍の治療成績」 第7回東日本手外科研究会、東京、2013年1月
51. 富田善雅、長濱 靖、楠瀬浩一、有富健太郎 「関節リウマチに対する人工指関節置換術の治療成績」 第27回東日本手外科研究会、東京、2013年1月
52. 三宅清彦、岡本三四郎、茂木 真、小屋松安子、坂本 優、田中忠夫 「子宮頸癌にて子宮摘出後発症した膣内悪性腫瘍に対する光線力学療法 (PDT) の有用性」 第64回日本産科婦人科学会学術講演会、神戸、2012年成24年4月
53. 嘉屋隆介他 「広範な腹膜播種を伴った卵黄嚢腫瘍の1例」 第53回日本臨床細胞学会総会、千葉、2012年6月
54. 坂本 優 一般講演座長 第53回日本臨床細胞学会総会、千葉、2012年6月
55. 坂本 優、嘉屋隆介、三宅清彦、小屋松安子、茂木 真、秋谷 司、佐々木 寛、田中忠夫、岡本愛光 「子宮頸がんに対する各種対策の効果と課題」 第20回がん検診・診断学会総会「シンポジウム3：女性特有のがん対策：効果と課題」、東京、2012年7月
56. 坂本 優、三宅清彦、小屋松安子、秋谷 司、茂木 真、室谷哲弥、岡本愛光、落合和徳、田中忠夫 「子宮頸部病変に対する円錐切除術後の遺残・再発に対する光線力学療法 (PDT) の有用性」 第52回日本婦人科腫瘍学会、東京、2013年7月
57. 嘉屋隆介他 「リポソーム化ドキシソルビシンはプラチナ製剤抵抗性再発Mullerian carcinomaの第1選択薬か？」 第52回日本婦人科腫瘍学会、東京、2012年7月
58. 坂本 優 一般講演座長 第30回日本ヒト細胞学会、大阪、2012年8月
59. 井手尾浩子、山下克子 「Functional roles of galectin-4 in malignant adenocarcinomas」 第71回日本癌学会学術総会、札幌、2012年9月
60. 菊池良子、坂本 優、他 「アレイCGH解析による卵巣癌関連遺伝子の同定と分子細胞診断への応用」 第51回日本臨床細胞学会秋期大会 ワークショップ、新潟、2012年11月
61. 坂本 優 ワークショップ「サイトメトリーの進歩と細胞診断学への応用」座長 第51回日本臨床細胞学会秋期大会、新潟、2012年11月
62. 井手尾浩子、星 郁栄 山下克子、坂本 優 「癌細胞の悪性度に関連したガレクチン-4及びそのリガンドの発現」 第85回日本生化学会大会、福岡、2012年12月
63. 嘉屋隆介 「膣原発悪性黒色腫の1例」 第364回東京産科婦人科学会例会、東京、2012年12月
64. 町野千秋 「抗がん剤による睫毛脱毛に対するビマトプロストの治療経験」 第35回日本美容外科学会総会、東京、2012年10月
65. 森 玄、他 第10回日本臨床腫瘍学会学術集会、大阪、2012年7月
66. 下田愛衣、山中里恵子他 「外来化学療法患者の看護～発熱対応フローチャート作成と導入時の看護師への教育～」 第27回日本がん看護学会学術集会、金沢、2013年2月

【研究会、講演】

1. 佐々木 敬「膵内分泌の再生を目指して～膵島の構築とβ細胞の増殖～」 第2回千葉糖尿病内分泌代謝研究会、千葉、2012年4月
2. 佐々木 敬.「多因子疾患を標的とした分子医学ーがん、糖尿病、血管障害における可能性」(公財)佐々木研究所附属杏雲堂病院 創立記念日講演会・第8回がん講演会、東京、2012年6月
3. 佐々木 敬. 膵島の構築と膵β細胞の再生. 東京慈恵会医科大学総合医科学研究センター合同発表会、東京. 2012年7月
4. 小尾俊太郎 「肝臓癌を救うのはエビデンスか熱意か？」 第13回神奈川リバーミーティング、横浜、2012年年5月
5. 小尾俊太郎 「進行肝細胞癌における分子標的薬の役割治療 動注845例の解析からみえたこと」 第33回兵庫肝炎研究会、神戸、2012年5月
6. 小尾俊太郎 「看取りからみた進行肝がんの治療ーsorafenibはどこで使うのか?ー」 第5回肝胆膵臨床腫瘍カンファレンス、東京、2012年7月
7. 八島陽子 「腹部超音波画像による腹部臓器の粗さの定量評価の研究・中間報告(ドック受診者の測定経過報告)」 平成23年度佐々木研究所臨床研究発表会、東京、2012年7月
8. 佐藤新平 「進行肝がんに対する夜間分枝鎖アミノ酸製剤の有用性」 平成23年度佐々木研究所臨床研究発表会、東京、2012年7月
9. 小尾俊太郎 「進行肝がんの治療ー臨床研究成績の報告ー」 平成23年度佐々木研究所臨床研究発表会、東京、2012年7月
10. 小尾俊太郎 「看取りから見た肝癌治療」 第4回 多摩肝腫瘍フォーラム、八王子、2012年10月
11. 小尾俊太郎 「TAEからいつ Sorafenibに切り替えるか？」 第3回肝アンギオ研究会、東京、2012年11月
12. 佐藤新平 「診断に苦慮した原因不明の若年発症した肝腫瘍の1例」 第110回腹部エコー研究会、東京、2013年1月
13. 小尾俊太郎 「Sorafenib投与中止の判断を考えさせられた1例」 第7回日本肝がん分子標的治療研究会、岐阜、2013年1月
14. 佐藤新平「 心臓直下の病変に対する”陽圧換気”無痛ラジオ波焼灼療法の実際」 第31回東京肝癌局所治療研究会、東京、2013年2月
15. 小尾俊太郎 「Sorafenibと動注の使い分け」 第2回北海道肝がん分子標的薬研究会、札幌、2013年3月
16. 小尾俊太郎 「歯科の先生方に役立つ肝臓の話題」 第572回デンタルセミナー例会、東京、2013年3月
17. 富田善雅 「橈骨遠位端骨折に対する掌側プレート法のピットホール」 2012年順天

堂手肘外科研究会、東京、2012年7月

18. 富田善雅 「関節リウマチの外科的療法について—(上肢機能再建)」 杏雲堂リウマチカンファレンス、東京、2012年11月
19. 富田善雅 第6回中央地区整形外科懇話会、主催・座長、東京、2012年11月

【総説】

1. 関谷剛男「核酸の分子構造及び生体の情報伝達におけるその重要性の発見 (1962年)」
Surgery Frontier 20: 15-20、2013
2. 関谷剛男「がんはDNAの病気 (1)」 Fluid Power 27: 77-80、2013
3. 関谷剛男「がんはDNAの病気 (2)」 Fluid Power 27: 52-56、2013
4. 仲野総一郎、森本真司 「レギュラトリーT細胞の機能とIL-35」 臨床免疫・アレルギー科 57: 384-389、2012
5. 富田善雅「手の使い過ぎで起こる腱鞘炎」 中学保険ニュース、少年写真新聞社、2012
6. 富田善雅「手の使い過ぎで起こる腱鞘炎」 高校保険ニュース、少年写真新聞社、2012
7. 坂本 優、嘉屋隆介、三宅清彦、小屋松安子、茂木 真、秋谷 司、落合和徳、栗津邦男、田中忠夫、岡本愛光 「子宮頸部初期癌ならびに異形成に対する光線力学療法(PDT)の現状と展望」 日本レーザー医学会誌 33: 117-121、2012
8. 三宅清彦、嘉屋隆介、小屋松安子、茂木 真、秋谷 司、田中忠夫、坂本 優、岡本愛光 「子宮頸部再発病変に対する光線力学療法(PDT)の現状と展望」 日本レーザー医学会誌 33: 136-140、2012
9. 坂本 優、嘉屋隆介、三宅清彦、茂木 真、田中忠夫、岡本愛光 「婦人科領域ガイドラインとレーザー医療 特集:光による診断と治療」 光アライアンス 24: 12-15、2013
10. 坂本 優、田中忠夫 「患者さんによくわかる薬の説明 2013年版」 メディクイックブック (金原出版) p943-944、2013

Ⅲ. 附属杏雲堂病院

1. 事業概況

当院は、「医学の進歩に寄与し、医業をもって社会に貢献する」という理念の下、創設当時から脚気や結核の診断と治療で社会に貢献し、その後は佐々木研究所の「がん研究」と両輪をなす「がんを中心とした医療」で社会に貢献してきた。加えて平成 24 年度当初から公益財団法人への移行認定を受け、今まで以上に研究への取り組みが重要な事業として位置付けられることになった。この結果、病院の医師に加えて主として臨床研究を行う研究者を迎えるとともに、研究目的で購入した機材を研究者間で共同使用するなど、臨床研究を行い易くするための環境を整備している。

また、病院としては「このがんなら杏雲堂病院で」のもと肝臓科、腫瘍内科、婦人科、外科など、がんを得意とする分野については平成 24 年度も体制整備を図り、積極的な広報活動を実施してきた。さらに今後は、高齢化に伴うがん患者の増加が予想されることから、「がんを中心とした医療」を標榜し、がん以外の疾患の診療にも十分対応可能な病院として認知されるよう努めている。具体的には、平成 24 年 10 月、医療連携の一環として近隣の医師にお集まりいただき、当院の方針をご理解頂くことで以後多数の患者さんをご紹介いただいている。このように地域医療連携を充実し、一般内科、一般外科、整形外科などがん以外の科も充実することで、より多くの患者さんを受け入れる体制を構築した。

この結果、年間外来患者数では、67,595 人と平成 23 年度実績の 66,825 人より 770 人増加（プラス 1.2%）した。外来診療収入でみると、患者数の増加および診療単価の増加が奏功し 877 百万円と平成 23 年度より 64 百万円の増収になっている。他方、入院患者延数については残念ながら 43,132 人と平成 23 年度比△3,871 人（△8.2%）減少し、入院収入も 1,980 百万円に止まったため、平成 23 年度比△74 百万円の減収となった。入院患者延数の減少が減収の主な要因だが、その背景として、頭頸部外科の廃止や医師の退職等によって常勤医師が期初（平成 24 年 4 月）から、5 名減少（30 人から 25 人へ）するなど、担当医師の変更も大きな要因である。がん以外の患者も受け入れていくための諸施策は緒に就いたところであり、平成 24 年度は反省すべき結果となったが、平成 25 年度は「このがんなら杏雲堂病院で」とともに、「神田駿河台で 130 年、地域とともに杏雲堂病院」をキャッチフレーズとして掲げ、病院全体の患者数を拡大していくための諸施策を実施していくという方向性を職員全員で共有することとした。

また、平成 24 年度後半以降、検診センターを主担当とする医師を配置し事務方等との定例会合を開催するなどセンター体制を整備、検診者拡大のため積極的に近隣企業への営業活動を行った。血中アミノインデックスがん検査など新しいがん検査も導入し検査選択の範囲を広げ、検診者拡大に注力した。この体制となってから、まだ半年であるが、平成 25 年度もさらに推進していきたい。

病院全体の職場文化あるいは職場風土の改善も重要課題として取り組んできた。診療支援部門が主催し全職員が参加した懇親会を開催するなど、異職種間も含めた職員同士の密なるコミュニケーションが図れるような職場風土の醸成にも取り組んでいる。人材育成についても、佐々木記念ホールを使用して、看護部、医療安全管理室、院内感染対策室などによる院内講演会を多数開催した。また、平成 24 年度後半で実施したレセプト精度診断にかかるコンサルテーション結果を受け、今後の収益増強策の一環として新たに診療報酬請求する準備を進めており、平成 25 年度具体的に実現していきたい。

最後に、経営基盤確立の観点から、「ムリ・ムダ」を省いてきたが、単なる縮小均衡ではなく、経営上必要などころには経営資源を重点投資している。具体的には、平成 24 年度は病院 1 階外来・2 階外来・検診センター等の改装を行い患者さんから好評であったが、平成 25 年度は 3 階以上についても院内改修を行い、患者談話室の設置も考えていきたい。また、医療器具についても投資対効果をみながら購入していく予定である。

IV 附属湘南健診センター

1. 事業概況

公益財団法人が経営する当センターは、公的な性格を帯びた健診センターとしての取り組みの一環として、以前より知的障害者施設の入所者に対する健診を受託しているが、今年度も 86 名に対して実施した。また希望者に対する胃内視鏡検査も 21 名に対して実施したが、今年度の新しい試みとして経鼻内視鏡検査が理解できる受診者に対して経鼻での検査も受け入れた。しかし鼻腔内を通すことに対する恐怖感からか実際の経鼻施行例は 2 例にとどまった。

当センターが取り組んでいる研究テーマである「無症候性胆石症例の長期追跡調査」に関しては、平成 24 年度中に新規に登録された例は 31 例であり、これまでの蓄積と合わせて総数 262 例となった。結石が粗大か小結石かと壁の肥厚を伴うか否かで 4 タイプに分類して研究しているが、今までのところ、粗大結石で壁肥厚なしが全体の 80%以上を占めている。逆に小結石で壁肥厚のある無症状の胆石は見つかっていないという、無症候性胆石に対する一定の傾向が研究成果として得られた。

近隣医療機関との提携関係は、従来の平塚共済病院に加えて平塚市民病院が主な提携先となった。その他の医療機関との関係も引き続き円滑であり、精査判定者の紹介先としての関係は良好に構築されている。また不安材料としては年度後半に婦人科健診医師の病气逝去があり、新たな婦人科医確保に努力を続けている。

施設移転から 7 年目を迎えた平成 24 年度は、経常収益 303 百万円と 3 億円を超え、年間受診者数は 1 万 3 千人を超え、ともに過去最高を記録し好成績であった。健診契

約先の需要に対応した結果、年間の受診者総数は 13,076 名（昨年度は 12,495 名、プラス 581 名、対平成 23 年度比 4.7%増）と平成 23 年度を上回り、平成 21 年度の過去最高数である 12,827 名を更新して、初めて 13,000 名の大台を超えることができた。健診の質及び接遇に重点を置いている当センターの伝統を堅持し、センター職員全員の努力で、これからも受診者に精度の高い快適な健診を提供していきたい。需要の平準化努力により、繁忙期と閑散期の落差はさらに改善されたが、今後は 3、4 月の年度切り替え前後の受診者数を増やす工夫が引き続き課題である。

受診コース別でみると人間ドックは 3,158 名（プラス 151 名、同 5.0%増）、成人病健診は政管、組合を合算して 5,085 名（プラス 166 名、同 3.4%増）と前年成績を上回った。また前年度に続いて婦人科検診、マンモグラフィー検査数も受診者が増加し、逆に定期健診は 67 名減となった。また、支出面では消耗品のコスト削減などに引き続き努力した。

平成 24 年度の内視鏡検査は検査日を週 3 日にした結果、検査総数は 1,106 例（プラス 326 例、同 41.8%増）と大きく増加し、日数を増やした効果が十分にあった。その内、経鼻内視鏡施行例は 903 例（プラス 298 例、同 49.3%増）で全体の約 82%に達した。このように経鼻内視鏡検査の希望者は年々増加が著しい。また懸案であった内視鏡装置の更新を慎重な機種選定の後、2 月末に内視鏡洗浄機と共に最新のものに更新し、受診者にとって苦痛の少ない検査を実施できた。

V. 収益事業

収益事業は、杏雲堂病院に隣接した商業ビルである杏雲ビル賃貸事業及び杏雲堂病院内にある駐車場事業の 2 事業である。御茶ノ水の不動産マーケットでは、大型オフィスビルの新規開発 2 件があり、需給関係が大きく変化し、特に賃料水準に大きな影響があった。杏雲ビルに関しては、東日本大震災の影響で大型テナントが期中に退出したが、平成 25 年 3 月末までに上記退出スペースの 6 割強が埋まり、更に残りの 4 割を上回るスペースの入居（平成 25 年度上期予定）が決定した。収支については、平成 23 年度実績と比較すると、空室率の上昇及び賃料条件の低下から減収減益となったが、予算と比較すると収入及び利益とも小幅ではあるが予算額を上回った。設備投資については、防災設備の更新及びテナント共用スペース（4 フロアー）のリニューアルを実施した。平成 25 年度には、空調設備の中央監視盤の更新及び共用スペースのリニューアルを予定している。

なお、駐車場事業については、ほぼ前年と同じ水準であった。

VI. 財団事務局

(1) 財団事務局の活動概況について

平成 24 年度は法人全体の運営方針を基に各施策の実施に注力し、また、公益財団法人の新たな基盤作り及び内部体制の整備を図った。

人材育成及び個人の能力が発揮できる職場環境作りに関し、外部委託先を含め、職場で働く全員を対象に業務改善提案の募集を行い、コスト削減及び業務の見直し等に関わる職員の意識を喚起し、また、その結果優秀案を含め具体的な実行を企画した。本提案制度を継続的に実施していきたい。患者及び検診受診者に対する満足度調査は、杏雲堂病院及び湘南健診センターで実施し、概ね満足度は高いものだったが、課題も発見されておりその解決に努めた。今後も継続的に実施していきたい。事務部門では、情報共有不足による連携不備や事務ミスの発生を防ぐため、会議情報、対処方針等についてメールを活用して周知徹底を図り、コミュニケーション強化により業務効率化を図った。

人事評価制度を策定する前段階として、医師以外の個人または部門を対象とした表彰制度策定を企図したが、平成 25 年度に構築予定の人事評価制度に吸収することとなった。人事制度の改定が今後の対処すべき課題と考える。

研究活動の推進及び公益財団法人のインフラ作りに関しては、医師兼務の研究員の受け入れ体制作り等の人事面の他、規程類及び施設の整備・修繕（空調機器他）の支援を行った。また、公益財団法人発足に合わせ、職制・分掌規則他 13 件の規則類の改定を行った。経理面では、平成 24 年度の新々公益法人会計への移行準備および実務対応が完了した。平成 24 年 9 月に中間決算の試算を行い、新公益財団法人が遵守すべき新財務基準等のチェックを実施した。システムに関しては、勤怠管理他の人事システム導入を図り、平成 25 年度上期に導入が完了する見込みである。

財務基盤の強化に関し、杏雲ビル運営事業において、不動産市況の低迷及び御茶ノ水地区におけるオフィス需給の悪化という要因もあったが、新規テナントの獲得に注力し、利益の減少を抑えた。そのため、不動産管理会社との折衝にあたりとともに、諸設備の更新を図った。また、研究機関として固定資産税の非課税追加申請を行い、今後、税額減少の可能性が高い。

(2) 評議員会・理事会に関する事項

1) 平成 24 年 4 月 18 日 臨時理事会開催

① 決議事項

- ・平成 24 年度事業計画の承認、平成 24 年度収支予算並びに資金調達及び設備投資計画見込みの承認、評議員会の招集、理事会開催日変更、臨時理事会の開催、財団顧問任命

2) 平成 24 年 4 月 27 日 臨時評議員会開催

- ① 決議事項
 - ・平成 24 年度事業計画の承認、平成 24 年度収支予算並びに資金調達及び設備投資計画見込みの承認、
- 3) 平成 24 年 6 月 7 日 第 1 回定例理事会開催
 - ① 決議事項
 - ・平成 23 年度事業報告・財務諸表の承認、評議員会の招集、基本財産の改定及び財産目録の承認、定款の一部改定、評議員会への理事・監事候補者の推薦、銀行借入の承認、就業規則の改定、職務発明規程の承認
 - ② 報告事項
 - ・経営会議報告他
- 4) 平成 24 年 6 月 21 日 定時評議員会開催
 - ① 決議事項
 - ・平成 23 年度事業報告・財務諸表の承認、基本財産の改定及び財産目録の承認、定款の一部改定、理事・監事の選任
- 5) 平成 24 年 6 月 21 日 臨時理事会開催
 - ① 決議事項
 - ・理事長・常務理事の選任、使用人兼務の委嘱、外部役員との賠償責任限定契約の締結
- 6) 平成 24 年 9 月 27 日 第 2 回定例理事会開催
 - ① 決議事項
 - ・職制・分掌規則の承認、稟議規程の改定、就業規則の改定、事務部長・副看護部長・顧問の任命、創立 130 周年事業の承認
 - ② 報告事項
 - ・業務執行状況、不動産管理・運用規程の制定、経営会議報告他
- 7) 平成 24 年 12 月 20 日 第 3 回定例理事会開催
 - ① 決議事項
 - ・平成 25 年度経営方針の承認、賞与資金借入の承認、役員人事
 - ② 報告事項
 - ・業務執行状況、組織変更、役員賠償責任保険の加入、事業報告・事業計画書検討会報告・経営会議報告他
- 8) 平成 25 年 3 月 13 日 臨時理事会開催
 - ① 決議事項
 - ・評議員会の招集、
- 9) 平成 25 年 3 月 21 日 第 4 回定例理事会開催
 - ① 決議事項
 - ・平成 25 年度事業計画・収支予算の承認、平成 25 年度資金調達及び設備投資の見込みの承認、理事会運営規則の改定、平成 25 年度役員会の日程、平成 25 年度役員等

報酬総額の承認、平成 25 年度銀行借入の承認、人事案件、就業規則の改定

② 報告事項

- ・業務執行状況、組織変更、内部貸借振替、経営会議報告他

1 0) 平成 25 年 3 月 21 日 評議員会開催

① 決議事項

- ・平成 25 年度事業計画・収支予算の承認、平成 25 年度資金調達及び設備投資の見込みの承認

(3) 各種届出に関する事項

1) 移行登記完了届出

平成 24 年 4 月 1 日付けで公益財団法人への移行が行われ、その後登記を済ませ、平成 24 年 4 月 16 日付けで内閣府に対し電子申請により届けた。

2) 定款の一部変更、評議員退任・理事退任・理事就任届出

平成 24 年 6 月 21 日付けで定款の一部変更（賠償責任限定契約の対象役員に外部監事を追加）、平成 24 年 6 月 21 日付けで梶浦 寛氏が評議員を退任し理事に就任、理事海老原 敏氏、吉野正曠氏及び桑田成美氏の退任、並びに古関博章氏及び山中健次郎氏が理事に就任したので、その登記を行い、平成 24 年 7 月 11 日付けで内閣府に対し電子申請により届けた。

3) 評議員退任届出

平成 24 年 12 月 9 日付けで評議員篠原寛休氏死亡のため退任したので、その登記を行い、平成 25 年 1 月 17 日付けで内閣府に対し電子申請により届けた。

4) 評議員退任届出

平成 25 年 1 月 17 日付けで評議員吉田尚氏死亡のため退任したので、その登記を行い、平成 25 年 2 月 19 日付けで内閣府に対し電子申請により届けた。

5) 事業計画等の届け出

平成 25 年 3 月 29 日付けで、平成 25 年度の事業計画書、収支予算書及び附属書類を、内閣府に対し電子申請により届けた。

平成 24 年度事業報告には、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律施行規則」第 34 条第 3 項に規定する「事業報告の内容を補足する重要な事項」が存在しないので、附属明細書を作成していない。